

# 博 多 162

— 博多遺跡群第208次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1368集

2019

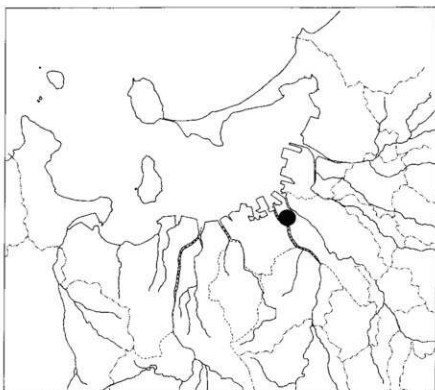
福岡市教育委員会



# 博多162

— 博多遺跡群第208次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1368集



遺跡略号 HKT-208

調査番号 1636

2019

福岡市教育委員会



## 序

現在、アジアにより一層開かれた活力のある国際都市を目指し、まちづくりを進めている福岡市は、古くからアジア大陸との交流を通じて発展してきました。本市ではこの交流を物語る文化財の保護に努めていますが、開発によりやむを得ず失われていく遺跡については、記録保存のための発掘調査を行なっています。

本書は、博多区店屋町における共同住宅建築に先立って行われた博多遺跡群第208次調査を報告するものです。調査の結果、中世から近世に至る遺構、遺物が発見され、当時の生活を復元するうえで多大な成果を上げることができました。本書を文化財保護や普及、教育などに活用していただければ幸甚に存じます。

最後になりましたが、発掘調査から整理、報告に至るまで、有限会社K&K建築地所様をはじめとする関係者の皆様には多大なご理解とご協力をいただきました。心から感謝申し上げます。

平成31年3月25日

福岡市教育委員会

教育長 星子 明夫

## 例言

1. 本書は福岡市博多区店屋町41番、42番における共同住宅建築に先立ち、福岡市文化財部埋蔵文化財課が平成29年1月16日から平成29年3月21日にかけて発掘調査を実施した博多遺跡群第208次調査の報告である。
2. 検出した遺構については一括して通し番号を付した。
3. 本書に掲載した遺構の実測、写真撮影及び製図は担当の井上嗣子が行った。
4. 本書に掲載した遺物の実測は林田憲三が、拓影は有島美江、林由紀子が、写真撮影は井上が、製図は井上、林が行った。
5. 本書の執筆、編集は井上が行った。
6. 本調査の出土遺物、記録類は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵、管理されるので活用されたい。

遺跡名	博多遺跡群	調査回数	208次	調査略号	HKT-208
調査番号	1636	分布地図図幅名	49天神	遺跡登録番号	401320121
申請地面積	273.89㎡	調査対象面積	170㎡	調査面積	109㎡
調査期間	平成29(2017)年1月16日～平成29(2017)年3月21日			事前審査番号	27-2-1113
調査地	福岡市博多区店屋町41番、42番				

# 目次

## 本文目次

I	はじめに	1
1.	調査に至る経緯	1
2.	調査の組織	1
II	遺跡の立地と環境	2
III	調査の記録	2
1.	調査の経過	2
2.	調査の概要	2
3.	遺構と遺物	5
(1)	井戸	5
(2)	土坑	19
(3)	溝状遺構	26
(4)	柱穴	28
(5)	その他の出土遺物	28
IV	まとめ	29

## 挿図目次

第1図	調査地点の位置 (1/1000)	3
第2図	調査区位置図 (1/500)	3
第3図	第1, 2面遺構配置図 (1/100)	4
第4図	第3面遺構配置図 (1/100)	5
第5図	調査区土層実測図 (1/80)	6
第6図	井戸実測図 (1) (1/60)	7
第7図	井戸出土遺物実測図 (1) (1/3)	8
第8図	井戸出土遺物実測図 (2) (1/3・1/4)	9
第9図	井戸出土遺物実測図 (3) (1/4・1/6)	10
第10図	井戸出土遺物実測図 (4) (1/3・1/4)	11
第11図	井戸出土遺物実測図 (5) (1/3・1/4・2/3)	13
第12図	099.100出土遺物実測図 (1/3)	14
第13図	井戸実測図 (2) (1/60)	15
第14図	井戸出土遺物実測図 (6) (1/3・1/4)	16
第15図	井戸出土遺物実測図 (7) (1/3・1/4)	17
第16図	井戸出土遺物実測図 (8) (1/3・1/4)	18
第17図	土坑実測図 (1) (1/20・1/40)	20
第18図	土坑出土遺物実測図 (1) (1/3)	21
第19図	土坑出土遺物実測図 (2) (1/3)	22
第20図	土坑実測図 (2) (1/40・1/20)	23
第21図	土坑出土遺物実測図 (3) (1/4)	24
第22図	溝状遺構068実測図 (1/20)	26
第23図	溝状遺構出土遺物実測図 (1/3)	27
第24図	柱穴実測図・柱穴出土遺物実測図 (1/20・1/3)	28
第25図	包含層出土遺物実測図 (1/3・2/3)	29
第26図	出土銅銭 (1/1)	30

## 図版目次

- |     |                             |                        |
|-----|-----------------------------|------------------------|
| 図版1 | 1 調査区南西側第1面全景（南西から）         | 2 調査区北東側第1面全景（南東から）    |
|     | 3 調査区南西側第2面全景（南西から）         | 4 調査区北東側第2面全景（南東から）    |
| 図版2 | 1 調査区南西側中央部第3面全景（北東から）      | 2 調査区北東側第3面全景（北西から）    |
|     | 3 調査区南西側南西部第3面全景（南西から）      | 4 井戸050（南西から）          |
|     | 5 井戸050井筒（西から）              | 6 井戸052（北東から）          |
|     | 7 井戸057（北東から）               |                        |
| 図版3 | 1 井戸028井筒2（北東から）            | 2 井戸099,100（南西から）      |
|     | 3 井戸033（西から）                | 4 井戸033井筒（東から）         |
|     | 5 井戸052,057,056の掘方土層断面（東から） | 6 井戸056（東から）           |
|     | 7 井戸102（北東から）               |                        |
| 図版4 | 1 井戸105（西から）                | 2 井戸111, 土坑079（北東から）   |
|     | 3 土師器集積036（北から）             | 4 集積076,溝状遺構068（北から）   |
|     | 5 土坑031（北東から）               | 6 土坑109（東から）           |
| 図版5 | 1 焼土119（南西から）               | 2 焼土119断面（南西から）        |
|     | 3 溝状遺構068（北東から）             | 4 溝状遺構068下面遺物出土状況（南から） |
|     | 5 柱穴118（北西から）               |                        |
| 図版6 | 1 拡張トレンチ1第1～2面（北西から）        | 2 拡張トレンチ1第3面（北西から）     |
|     | 3 拡張トレンチ2第1面（北東から）          | 4 拡張トレンチ2第2面（北東から）     |
|     | 5 拡張トレンチ3第3面（北東から）          | 6 調査区北西側壁（南から）         |
|     | 7 調査区北東側壁（南西から）             |                        |
| 図版7 | 遺物写真1                       |                        |
| 図版8 | 遺物写真2                       |                        |



# I はじめに

## 1. 調査に至る経緯

2016（平成28）年3月18日付で（有）K&K建築地所より共同住宅建設にかかる事前審査申請書が福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財審査課（当時）に提出された。申請地は博多遺跡群に所在し、周辺では発掘調査等により遺跡の存在が確認されていることから、建築物の基礎構造によっては発掘調査が必要なこと等について、埋蔵文化財審査課と申請者との間で協議を行い、確認調査を実施した。その結果、遺跡の存在が確認され、予定建築物の建設範囲において記録保存のための発掘調査が必要となった。その後申請者と発掘調査期間、予算、工程等について協議を行い、発掘調査のための委託契約を締結した。調査は2017（平成29）年1月16日に着手し、2017（平成29）年3月21日に終了した。

## 2. 調査の組織

調査委託 （有）K&K建築地所

調査主体 福岡市教育委員会

（発掘調査：平成28年度・資料整理：平成30年度）

調査総括	文化財部埋蔵文化財課	課長	常松 幹雄（28年度）
	文化財活用部埋蔵文化財課	課長	大庭 康時（30年度）
		調査第1係長	吉武 学
庶務	文化財部埋蔵文化財課	管理係長	大塚 紀宜（28年度）
		管理係	入江よう子（28年度）
	文化財活用部文化財活用課	課長	松本 真人（30年度）
		管理調整係長	藤 克己（30年度）
		管理調整係	松尾 智仁（30年度）
事前審査	文化財部埋蔵文化財課	事前審査係長	佐藤 一郎（28年度）
		主任文化財主事	池田 祐司（28年度）
		事前審査係	大森真衣子（28年度）
	文化財活用部埋蔵文化財課	事前審査係長	本田浩二郎（30年度）
		主任文化財主事	田上勇一郎（30年度）
		事前審査係	中尾 裕太（30年度）
			朝岡 俊也（30年度）
調査担当	文化財活用部埋蔵文化財課	主任文化財主事	井上 蒨子
発掘作業	岩永いさ子 上原高子 大橋善平 鹿見島秀雄 辛川容子 久保サヨ子 桑原美津子 小島君子 網嶋年朗 中村秀策 林田昌俊 原野容子 室井三太郎 森一雄		
整理補助	林田憲三		
整理作業	有島美江 林由紀子 田中朋香 箱嶋ひかり		

## II 遺跡の立地と環境

博多遺跡群は、福岡平野北側の博多湾岸に位置し、那珂川と御笠川の河口に挟まれた三角州平野上に形成された遺跡群である。博多遺跡群の立地する砂丘地形は南から「博多浜」と「息浜（おきのはま）」の二つに分けられ、「博多浜」はさらに二つの砂丘から形成される。現在の博多の町は、この砂丘地形上にさらに2～5mほど盛土されて形成されているものの、現状でも埋没した旧地形の形状をよく反映している。

今回の博多遺跡群第208次調査地点は、北側から2番目の博多浜の砂丘上の北西部に位置する。本調査地点の周辺には調査事例が多い。南東側には85次調査地点、北西側には126次調査地点が隣接し、北側には158次調査地点が位置する。85次地点では、7世紀後半頃から近世初頭の生活跡が確認されている。多くの緑釉陶器、越州窯青磁、2点の銭貨鋳型が出土している。また、中世後半の鋳物関連の遺物や遺構が多い。126次調査地点では、奈良時代から16世紀頃までの生活跡が確認されており、溝、井戸、土坑列などが検出された。158次調査地点では、8世紀中頃から14世紀頃までの遺構が中心であり、8世紀中頃から後半にかけての時期である鍛冶炉、製塩土器の出土が特筆される。

## III 調査の記録

### 1. 調査の経過

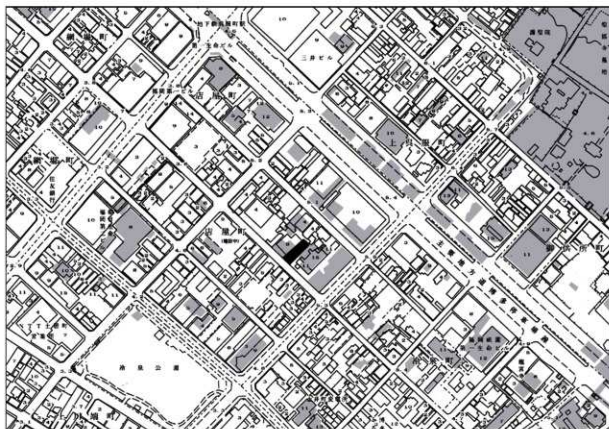
発掘調査は、当該工事の地下への影響が及ぶ170㎡を対象とした。事前の試掘調査では、地表面から約200cm下の面を中世の遺構面第1面とし、第2面までの遺構面を確認した。工事は杭打ちを先行して行うこととしたため、まず杭打ちを行い、その後第1面の上面までの盛土の除去と土留め工事を事前に事業主側で行った後、当該現場内反転して発掘調査を行うことにした。なお、敷地内における発掘調査範囲位置の関係で、敷地の奥に設置してある事務所プレハブまで発掘調査範囲内を通らなければならないこと、建築物の先行設置杭が両サイドに位置することから、結果的に杭の幅分を作業用通路として残し遺構面までの掘削を行った。

発掘調査は平成28年1月16日に開始した。調査対象範囲の南西側から人力での遺構検出及び掘削、図面作成及び写真撮影を行った。南西側の調査で設定した遺構面は2面である。北東側は、南西側の第1面に相当する面と第2面である砂丘面の間に明茶褐色砂質土層が挟まれていることからこの上面でも遺構面を設定し、都合3面の調査となった。

最後に器材の撤収、片づけ、出土遺物及び器材の洗浄等を行い、平成28年3月21日に調査を終了した。

### 2. 調査の概要

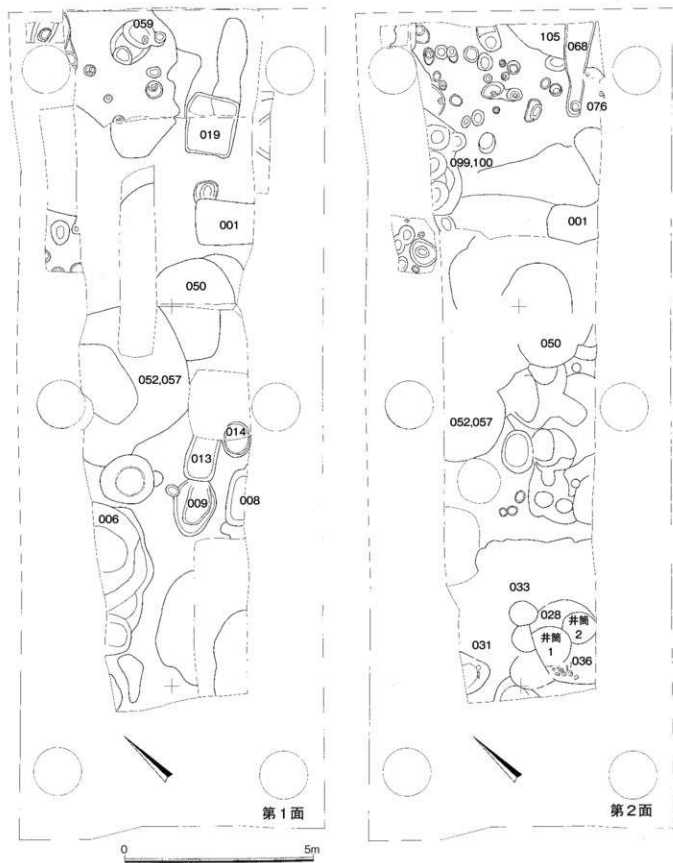
本調査地点の南東側に隣接する第85次調査地点では5面の遺構面を設定している。一方北西側に隣接する第126次調査地点では2面の遺構面を設定している。今回本調査地点で第1面に設定したのは標高3.0～3.3mで第85次調査地点の第1面より低い面となる。ただ、後述のように第1面で検出された遺構は大半が近世の遺構であった。全体に暗褐色ないし灰褐色土層が広がる面である。井戸、土坑、柱穴、溝状遺構の上面が検出された。南西側北東寄りでは、第1面から30cm掘り下げたところ基盤砂丘面が検出されたためここを第2面とした。しかし、井戸の掘方である褐色土が広がる南西側南西寄りでは一部に北東側で検出された明茶褐色土層が確認されている。南西側において調査上は2面設定



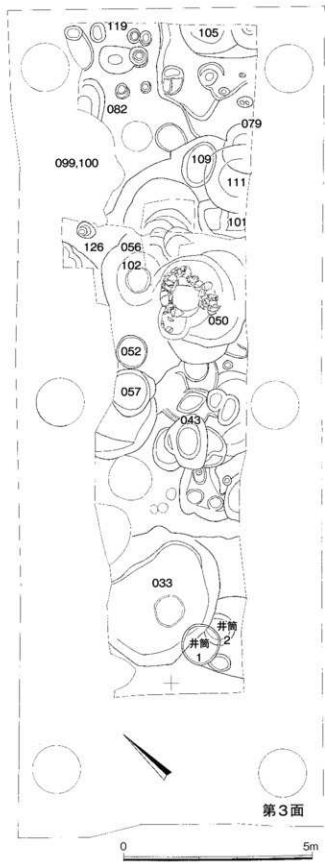
第1図 調査地点の位置(1/1000)



第2図 調査区位置図(1/500)



第3図 第1・2面遺構配置図(1/100)



第4図 第3面遺構配置図(1/100)

としたが、遺構の切り合いや井戸掘方上面に遺構が検出されたことから本報告上は3面の設定としている。北東側の第2面は前述のとおり明茶褐色土層上面である。標高27~3.0mである。遺構は井戸、土師器の集積、溝状遺構、柱穴が検出された。第3面は基盤砂丘上面である。標高25~2.9mである。上面からの掘り残り遺構が多い。

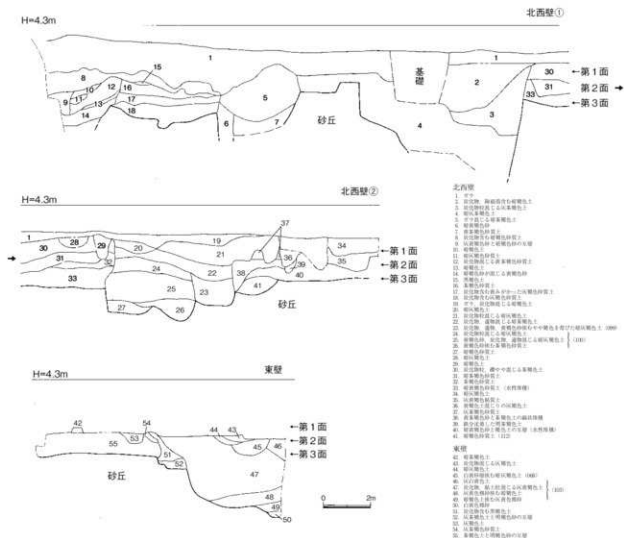
### 3. 遺構と遺物

上述のように、調査上の遺構面設定と報告上の遺構面設定が異なること、井戸の切り合いが多く各面での遺構の確認が困難であったことから、以下では遺構ごとの説明を行う。

#### (1) 井戸

**006 (第6図)** 第1面で検出した。調査区南西側の北西壁に切られる。残存部分で長軸4.0m、残存幅1.5m、井筒は90cm深さまでしか掘削できなかった。出土遺物から17世紀以降の時期と考える。

**出土遺物 (第7図1~7)** 1は白磁碗。底径6.0cm。高台外側まで透明釉がかかり、高台内部は露胎となる。見込みに沈線が巡る。2は肥前系の磁器の猪口。復元口径7.3cm、器高3.7cm、復元底径3.0cm。淡灰白色の釉が外面と高台内部にかかり、畳付は露胎となる。3は朝鮮王朝の青磁碗。復元底径7.0cm、灰色の胎土に半透明のオリープ色の釉が外面にかかるが、畳付は釉が掻き取られ、目跡が残る。見込みに目跡が残る。4は土師器杯。口径13.2cm、器高2.7cm、底径8.0cmを測り、底部は板圧痕が残る。5は土師器の仏飯器の脚部か。裾部径は6.5cm。坏部との接合面には穿孔が見られる。6は須恵器高坏の脚部。7は蛸壺。復元口径7.0cm、器高6.0cm。



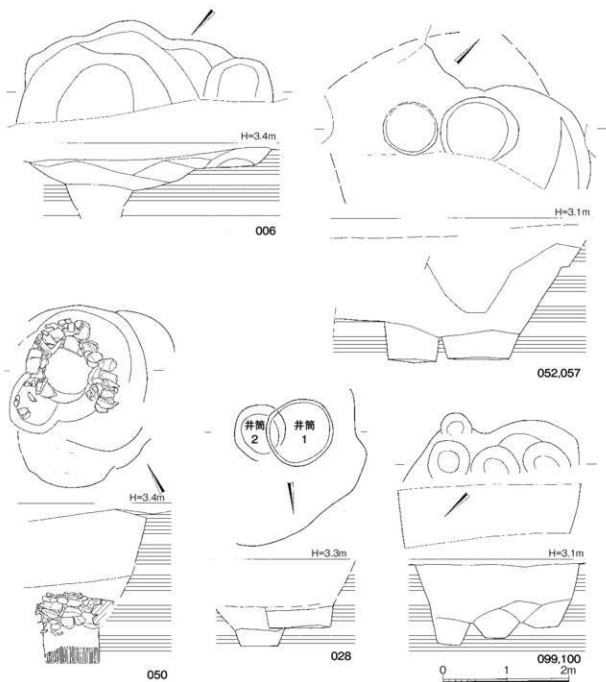
第5図 調査区土層実測図(1/80)

028 (井筒1, 井筒2)(第6図) 033の井筒の南側に近接して検出された。掘方は第1面で検出されている。井筒1は径が1.1m, 井筒2は径が80cmであり, 井筒の底部の標高がそれぞれ2.3m, 1.9mと高い。結核などは確認されていない。出土遺物から15世紀頃か。

出土遺物(第7図8~30) 8~13は井筒1から出土している。8は土師器杯。復元口径15.8cm, 器高3.3cm, 復元底径11.0cm。糸切底である。9は土師器皿。復元口径6.7cm, 器高1.4cm, 復元底径5.0cm。底部は糸切りで板圧痕が残る。10~13は鉄製釘。14~17は井筒2からの出土。14は土師質の播鉢。内面に5条の摺目が入る。15は土師器皿。口径7.2cm, 器高1.3cm, 底径4.7cm。糸切底で板圧痕が残る。16はミニチュアの壺形土製品。口径1.9cm, 器高2.2cm, 底径3.0cm。17も土製品。型押し製品である。

18~30は掘方からの出土。18は土師質の釜。復元口径28.0cm。頸部に雷文帯のスタンプ文と縦線の連写文が巡る。19は土師器杯。口径12.3cm, 器高2.7cm, 底径7.8cm。糸切底で板圧痕が残る。20~25は土師器皿。口径6.5~7.6cm, 器高1.2~1.5cm, 底径4.7~5.8cm。すべて糸切底で, 24は口縁部に打ち欠きが見られる。25は口縁部に煤が付着する。26~30は鉄製釘。

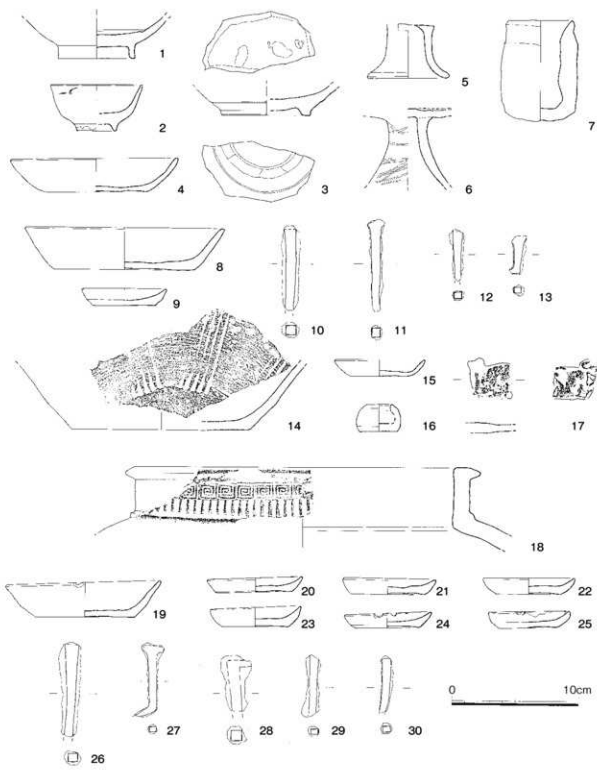
050(第6図) 掘方は第1面で検出した。石組井側, 井筒の検出は第3面となる。調査区中央付近に位置する。掘方は井戸052, 057の掘方に切られる。第1面の掘方の最大径は3.0m, 石組の内径は70



第6図 井戸実測図(1)(1/60)

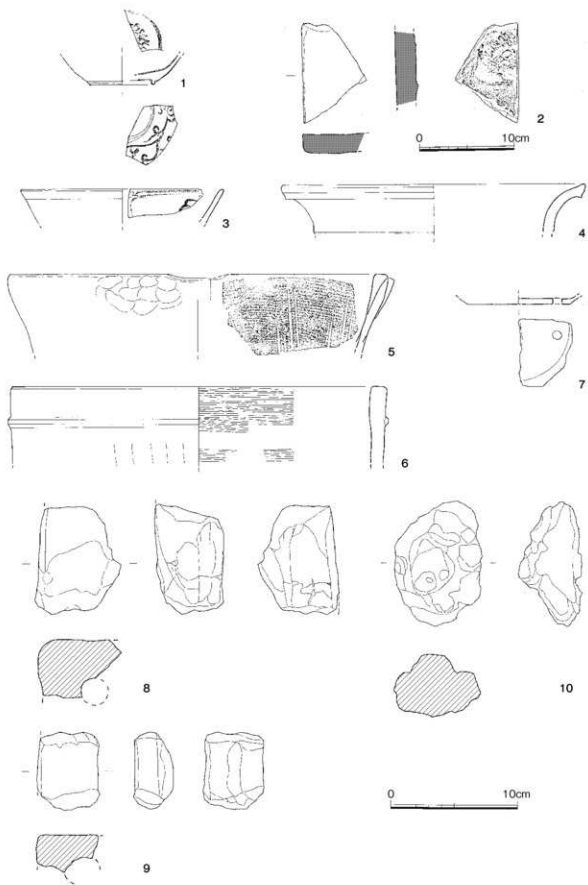
cmである。井側石組の残存高さは50cm程であるが、掘方内に礫が含まれており、本来は上部まで積み上げられていたと考えられる。結桶の井筒が底部に据えられている。石組の裏込めや井筒内から瓦片が多量に出土しているが、完形の瓦も数点出土しており、石組もしくは井筒の上に瓦が積まれていたとも考えられる。湧水点は標高0.9mである。16世紀前後の時期か。

**出土遺物（第8図～第10図）** 第8図1、2は井筒底面で出土した。1は明時代の青花皿。復元口径5.0cmで碁筒底である。内外面に青みがかった白色の釉がかかり、畳付は露胎となる。目跡が残る。見込みには圏線と花文、外面には唐草文が描かれる。2は軒平瓦。凹面には板状工具によるナデ、凸面には格子目状のタタキが見られる。第8図3～10は井側底付近で出土した。3は青磁碗。復元口径16.0cm、透明なオリーブ色釉がかかる。口縁部は輪花となり、内面に片切彫りによる花文が描かれる。口縁部外面には沈線が巡る。4は須恵器壺の口縁部。復元口径24.0cm。外面に自然釉がかかる。

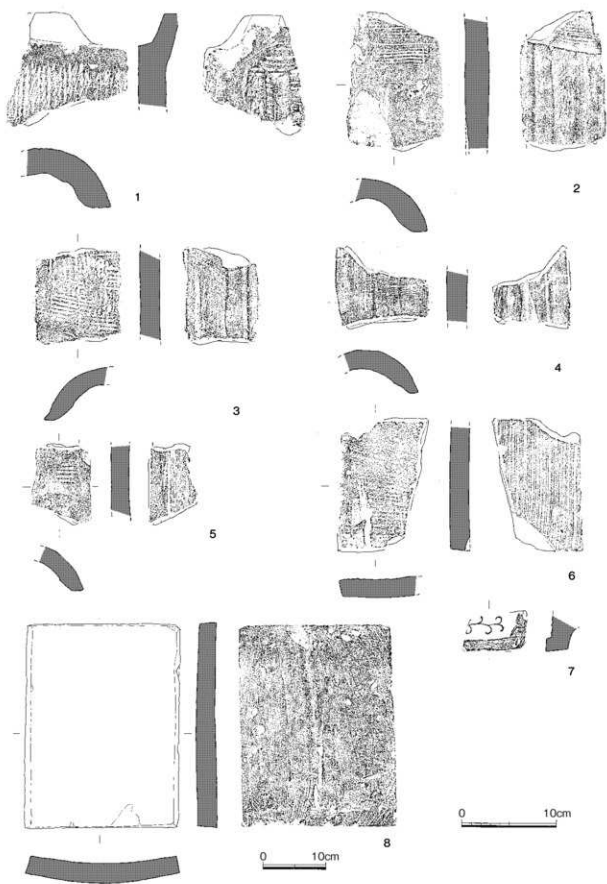


第7図 井戸出土遺物実測図(1)(1/3)

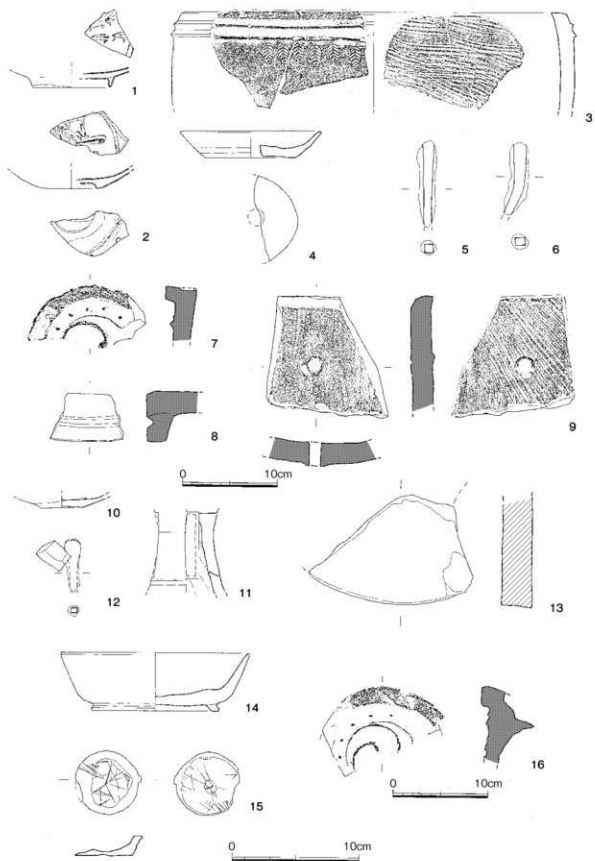




第8図 井戸出土遺物実測図(2)(1/3-1/4)



第9図 井戸出土遺物実測図(3) (1/4・1/6)



第10図 井戸出土遺物実測図(4) (1/3-1/4)

5は須恵質の片口鉢鉢。復元口径は30.0cmで、内面に刷毛目の後摺目が見られる。6は瓦質の火舎。復元口径29.6cm、口縁部下に突帯が巡る。内面は横方向のハケメが見られる。7は底部に穿孔のある土師器杯。復元底径8.0cm。ヘラ切りの底部である。8、9は羽口の破片。いずれも断面が方形で中央部に管を施す。10は鉄滓。重量が339gで、鉄金属が残存する。第9図は瓦片で井側底からの出土。1～5は丸瓦。いずれも凸面にはタタキ、凹面には布目痕が見られる。6は平瓦。両面ともにハケメが見られる。7は軒平瓦。瓦当面には唐草文が施される。8は完形の平瓦。凹面にはヘラ状工具によるナデ、凸面には板状工具によるナデが施される。8を除いた瓦片は井側石組の裏込めに用いられていたと考えられる。

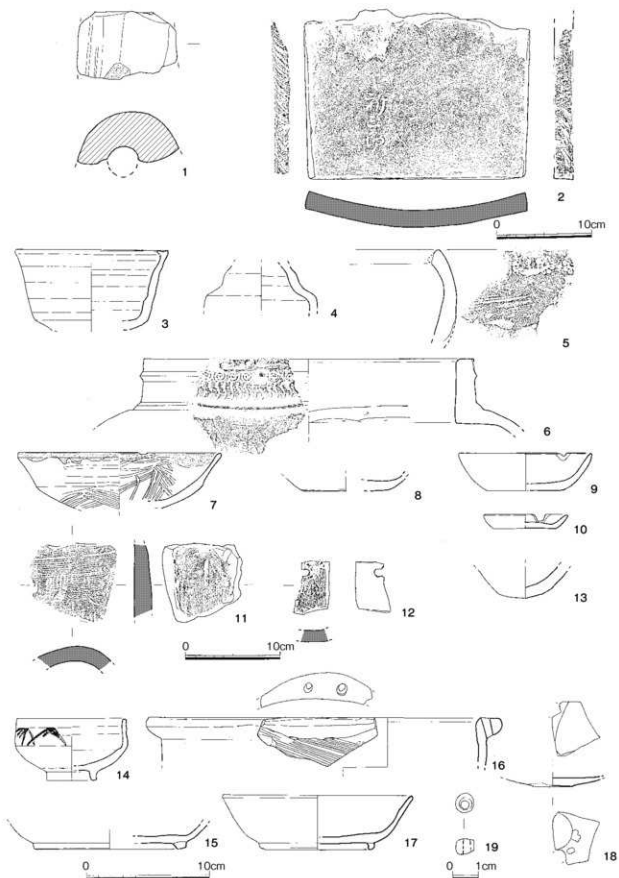
第10図1～9は井側内で出土したものである。1、2は明時代の青花皿。1の復元底径は6.0cm。青みがかった白色の軸がない外面にかかり、壺付は露胎となる。見込みには圏線と松葉様の文様を描く。2は碁笥底で、復元底径は4.0cm。壺付は露胎となり、淡青白色の軸がかかる。見込には「寿」と思われる文字と二重圏線、外面には圏線と文様が描かれる。3は瓦質の火舎。復元口径30.4cm。外面口縁部下に綾杉のスタンプ文が巡る。4は土師器杯。復元口径11.2cm、器高21cm、底径9.4cm。底部に穿孔が見られる。5、6は鉄製釘。7～9は瓦片。7は軒丸瓦。三巴文と珠文を配す。8は軒平瓦。9は穿孔のある平瓦片。10～13は井側石組裏込めとして使用されていたものである。10は白磁皿。底径3.3cm、乳灰色の軸がかかる。底部は露胎となる。11は須恵器高杯の脚部。透かしが2か所入る。12は鉄製釘。土師器皿片が付着する。13は円盤状の瓦質土製品。復元径24.0cm。穿孔が円盤の端に施されているため、半円状となる。14～16は050の掘方上層出土である。14は須恵器の高台付き杯。復元口径14.9cm、器高4.6cm、復元底径10.0cm。15は滑石製石鍋の転用品か。紡錘車の未成品である。外側からの穿孔の痕跡が残る。16は軒丸瓦。瓦当面に三巴文と珠文が配される。

**052, 057 (第6図)** 掘方は第1面で検出した。調査区中央付近に位置し、井戸050の掘方を切る。掘方の最大径は約4mである。掘方を掘り下げたところ、2か所井筒の掘り込みが確認された。結構などはない。湧水点は0.9mである。17世紀代。

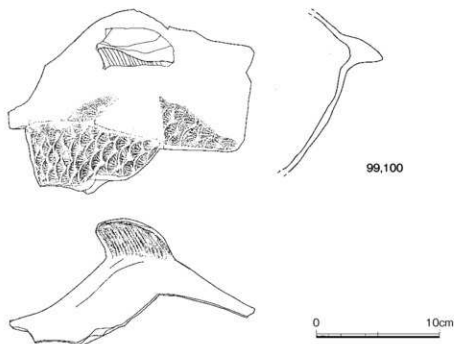
**出土遺物 (第11図1～13)** 1、2は057井筒から出土した。1は羽口片である。復元径8.0cm、復元口径2.5cm。2は平瓦。表にスタンプ様で「祈(?)三鳥(?)」と刻まれる。3～13は掘方出土した。3は青磁の火入れ。復元口径12.0cm、残高6.4cm。内外面に青みがかったオリーブ色軸がかかるが、内面は下半が露胎となる。4は陶磁器の花器か。5は瓦質の火舎。口縁外面にスタンプ文が巡る。6は瓦質の釜。口縁外面には乳頭文と渦巻文が巡る。7～9は土師器の杯。7は復元口径16.0cm、残高4.4cm。内外面はミガキ調整がなされ、口縁部内外面には煤が付着する。口縁部に一部打ち欠きが見られる。8は復元底径7.0cm。底部に板圧痕が残る。9は復元口径10.5cm、器高3.0cm、復元底径6.0cm。糸切底で口縁部に打ち欠きが見られる。10は土師器皿。復元口径6.6cm、器高1.1cm、復元底径5.0cm。糸切底で口縁部に打ち欠きが見られる。11、12は瓦。11は平瓦。凸面はタタキ、凹面は布目痕が見られる。12は平瓦。瓦留めの釘孔と思われる孔が見られる。13は増埒。内部に緑青が見られる。

**099, 100 (第6図)** 調査区の北寄りに位置する。掘方は第1面の拡張部で検出された。2面目で掘り下げた段階では井戸か判別できなかったが、拡張部で遺構面の広がりか確認され、大きさから井戸と推定した。最大径は約3mである。博多人形が出土している。近世。

**出土遺物 (第11図14～19, 第12図)** 14, 15は099から出土した。14は鉄絵の陶器碗。復元口径8.7cm、器高4.9cm、底径4.0cm。肥前系か。15は須恵器の高台付き杯。復元底径12.0cmである。16～18は



第11図 井戸出土遺物実測図(5)(1/3・1/4・2/3)



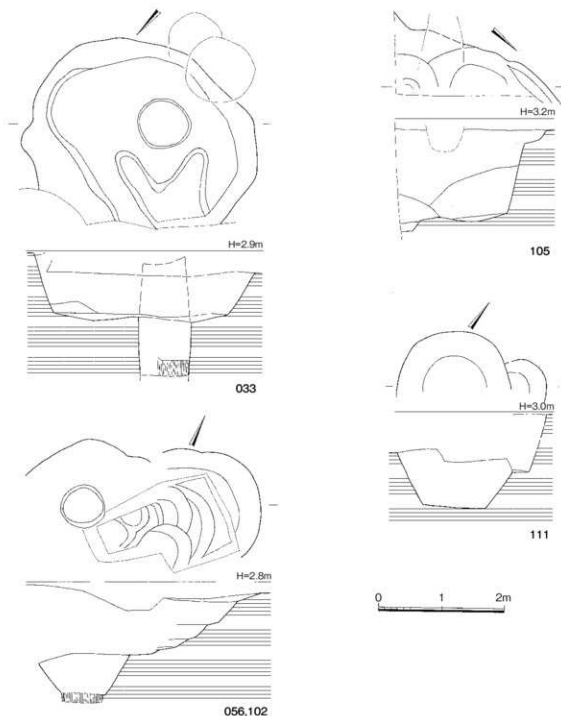
第12図 099,100出土遺物実測図(1/3)

100からの出土。16は土師質の鉢。復元口径は28.2cm。口縁部から張り出した把手に孔が2カ所穿たれる。17は須恵器の高台付きの坏。復元口径15.0cm、器高4.3cm、底径9.0cm。18は白磁皿の葎筒底の底部片。底部外面は露胎となる。穿孔が見られる。19はガラス玉。径7.0mm、厚さ6.0mm、穿孔径3.0mm、重量0.5gである。第12図は魚型の博多人形である。鱗や尾びれが精緻に表現されている。この他、人を集った人形も出土している。

033 (第13図) 第2面で掘方及び井筒を検出した。調査区南西側に位置する。この周囲は井筒が集まっている個所である。掘方は最大径が3.6m、井筒の径は83cmである。井筒の底部に結桶が据えられている。湧水点は0.9mである。井筒の検出面から土師器の坏が出土し、底部付近になるにつれて多量に投棄されていた。井戸廃棄時の祭祀か。廃絶は14世紀頃と思われる。

出土遺物 (第14図、第15図) 第14図1～3は井筒底部での出土である。1、2は土師器の坏。復元口径は、11.8、11.6cm、器高2.5、2.3cm、底径7.0、8.0cm。糸切底である。3は土師器皿。復元口径8.4cm、器高1.5cm、底径6.0cm。4～39は井筒の下層から出土した。4～10は白磁碗の口縁部。11は陶器鉢。黄褐色釉がかかる。口縁部は軸ハギで目跡が残る。12、13は黒褐色釉がかかる陶器。12は耳付の鉢。13は鉢か。14は無釉の陶器壺の底部。15は挿鉢片。16～30は土師器の坏である。口径11.9～13.0cm、器高2.3～3.1cm、底径7.8～9.5cm。17、19、20、24、28、30は板条土痕が残る。また、18、27、28、30は口縁部に意図的な打ち欠きが見られ、28は底部に鉄釘が付着している。31～38は土師器皿。口径6.4～8.2cm、器高0.9～1.6cm、底径4.0～6.0cm。31～34、36、37は板条土痕が残る、36は口縁部に意図的な打ち欠きが見られる。39は鉄製の釘である。

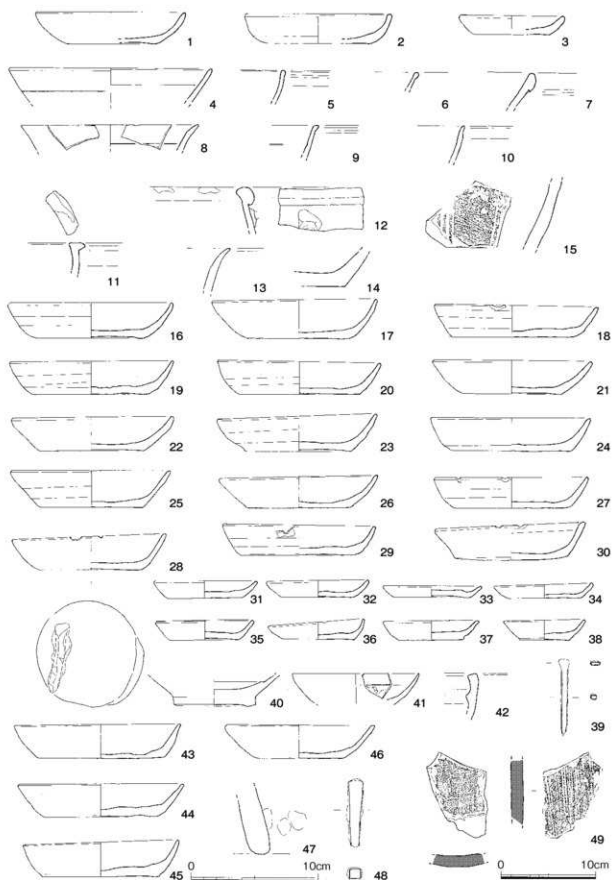
40～49は井筒から出土した。40は白磁碗。内面には灰白色の釉がかかるが、外面は露胎となる。復元底径6.5cm。41は白磁皿。復元口径10.0cm。灰白色の透明釉がかかり、内面に圈線、劃花文が施される。42は陶器鉢の口縁部。無釉である。43～46は土師器坏。口径11.8～13.2cm、器高2.6～2.7cm、底径



第13図 井戸実測図(2)(1/60)

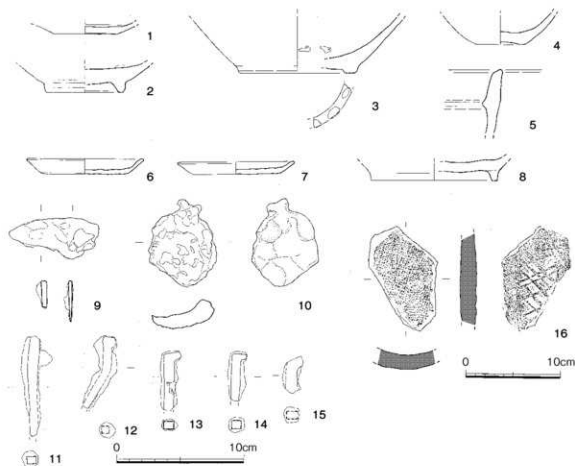
9.0~10.0cm。すべて糸切底である。47は弥生土器の器台底部片。48は鉄製釘。49は平瓦片。表面に布目、裏面に縄目タタキ痕が残る。

第15図は掘方から出土した。1は白磁皿。復元底径5.0cm。内外面に白色釉がかかるが、底部外面は露胎となる。2は龍泉窯系青磁碗。復元底径6.0cm。内外面にオリーブ色釉がかかるが、高台内部は露胎となる。3は越州窯系青磁碗。復元底径9.0cm。内外面にオリーブ色釉がかかるが、高台畳付の釉ははぎ取る。また、畳付、内面見込みに目跡が残る。4は陶器の皿か。復元底径3.8cm。赤褐色の胎土に褐色よりの暗緑色釉がかかる。底部外面は露胎となる。5は陶器鉢の口縁部。無釉である。6、7は土師器皿。復元口径9.2cm。器高1.2、0.95cm、底径7.0cm。いずれも薄手の作りで底部はヘラ切りで6



第14図 井戸出土遺物実測図(6) (1/3-1/4)



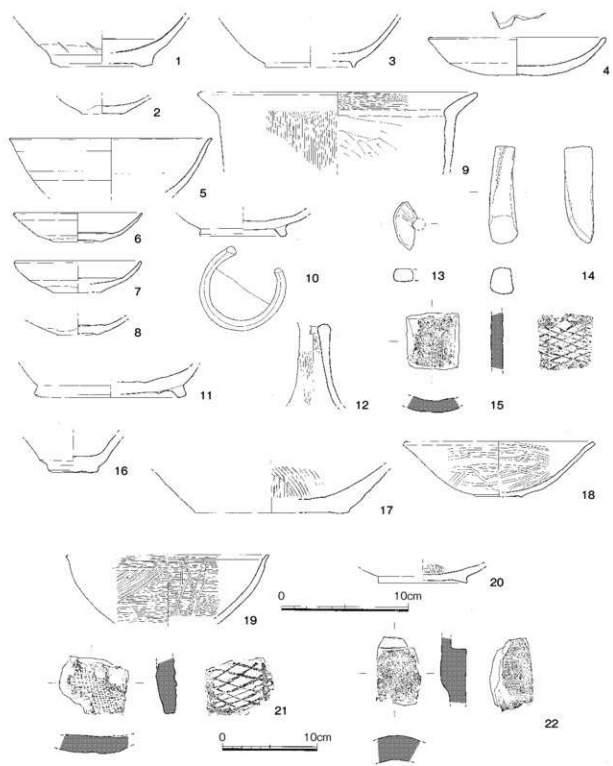


第15図 井戸出土遺物実測図(7)(1/3・1/4)

は板圧痕が残る。京都系土師器皿。8は須恵器杯の底部。復元底径10.0cm。9は鉄製刀子片。残長7.0cm、幅3.2cm。10は椀状の鉄製品。11~15は鉄製釘。16は平瓦。凹面が布目、凸面が格子目タタキの調整が残る。

105(第13図) 掘方は第2面で検出した。溝状遺構068に切られる。調査区の北東壁に切られており、掘方の全容は明瞭でなく、井筒も検出されていないが、土層状況から井戸と考えた。遺構の切り合いや、出土した白磁や土師器から11~12世紀代と考える。

出土遺物(第16図1~15) 1~5は底部付近で出土した。1は白磁碗。復元底径8.0cm。やや透明な軸が内外面にかかるが高台付近は露胎となる。2は白磁皿。底径3.2cm。底部付近は露胎となる。3は高麗青磁碗。灰褐色の胎土に半透明のオリープ軸が内外面にかかる。内面見込みと高台内部に目跡が残る。4は土師器杯。復元口径14.0cm、器高3.0cm。内面はヘラミガキ調整がなされ、底部はヘラ切りで板圧痕が残る。底部に穿孔が見られる。5は白磁碗。復元口径16.0cm。内面に一条の沈線が廻り、内外面に透明軸がかかる。6、7は白磁皿。口径10.0cm、器高2.3、2.5cm、底径3.8cm。いずれも淡灰褐色の透明軸がかかるが底部は露胎となり、見込みに一条の沈線が巡る。8は青白磁皿。復元口径3.2cm。半透明の青白色軸がかかる。底部は露胎となり、見込みに一条の沈線が巡る。9は土師器の甕。復元口径22.0cm。外面と口縁内面はハケメ、胴部内面はケズリで調整する。10は瓦器碗。復元底径6.8cm。底部外面に一条の線刻が施される。11は須恵器杯。復元底径は12.0cm。12は土師器高坏の脚部。13は滑石製の紡錘車。復元径4.0cm、厚さ1.0cm、重量10.1gである。14は玄武岩製の片刃石斧である。全長7.6cm、幅1.9cm、厚さ2.05cm、重量50.3gである。15は平瓦。凹面は布目、凸面は格子目タタキの調整が残る。



第16図 井戸出土遺物実測図(8)(1/3-1/4)

**056・102 (第13図)** 調査区中央付近に位置し、050、052、057と切り合う。056は052、057を掘削中に確認された。径60cmの結構が据えられた井筒が検出された。湧水点は標高0.9mである。102は調査区反転時の境界付近に位置し、掘り残した範囲に相当したため、トレンチ掘削をして確認したが、井筒などは検出されなかった。056の掘方の一部と考える。近辺の井戸との切り合い関係は、新しい順で、052・057→050→056・102となる。

**出土遺物 (第16図16~21)** 16~18は056出土。16は天目碗。底径4.0cm。内面には黒褐色、外面には暗褐色釉がかかる。胴部下半は露胎となる。外底には墨書が施される。17は須恵質の播鉢。復元底径は12.0cm。内面に摺目が見られる。18は瓦器碗。内外面ともにヘラミガキが施される。復元口径15.2cm、器高4.4cm、復元底径5.7cm。ごく低い高台が貼り付けられる。

19~21は102出土。19は瓦器碗。復元口径16.0cm。内外面ともにヘラミガキが施される。20は黒色土器碗。復元底径7.0cm。内面にヘラミガキが施される。底面には高台がつく。21は平瓦。凹面に布目、凸面に格子目タキが見られる。

**111 (第13図)** 調査区北東側、南東壁に切られる。第3面で検出した。最大径が1.8mの平面円形の掘方である。井筒は確認されていない。

**出土遺物 (第16図22)** 丸瓦。凹面に布目が見られる。

## (2) 土坑

**001 (第17図)** 調査区北東側に位置し、南東壁に切られる平面長方形の土坑である。第1面検出時で残存長1.5m、幅1.2m、深さは1.2mに達した。羽口や多量の鉄滓が出土し、製鉄関係の廃棄土坑と考えられる。17世紀以降である。

**出土遺物 (第18図)** 1は近世の白磁碗。口径11.4cm、器高6.4cm、底径5.0cm。乳白色の釉が全面にかかる。2は近世の青磁碗。復元底径5.0cm。透明なオリーブ色釉がかかり、畳付は釉を剥ぎ取る。高台付近の外面にはナナメのケズリ痕が見られる。3は磁器の注口付鉢。復元口径18.4cm。透明なオリーブ色の釉がかかる。4は陶器の播鉢。復元底径12.0cm。5は青磁高炉の脚部。内面は片切彫りの弧線を施し、薄いオリーブ色の釉をかける。6、7は土師器小皿。口径8.7、8.6cm、器高1.6、1.4cm、底径6.4cm。糸切り離し底部。8は土鈴片。9、10は羽口片。断面円形で管の部分の表面を滑らかに仕上げられる。11~13は鉄製釘。14は土錘。15は鉄滓。鉄滓はコンテナケースで4箱出土している。

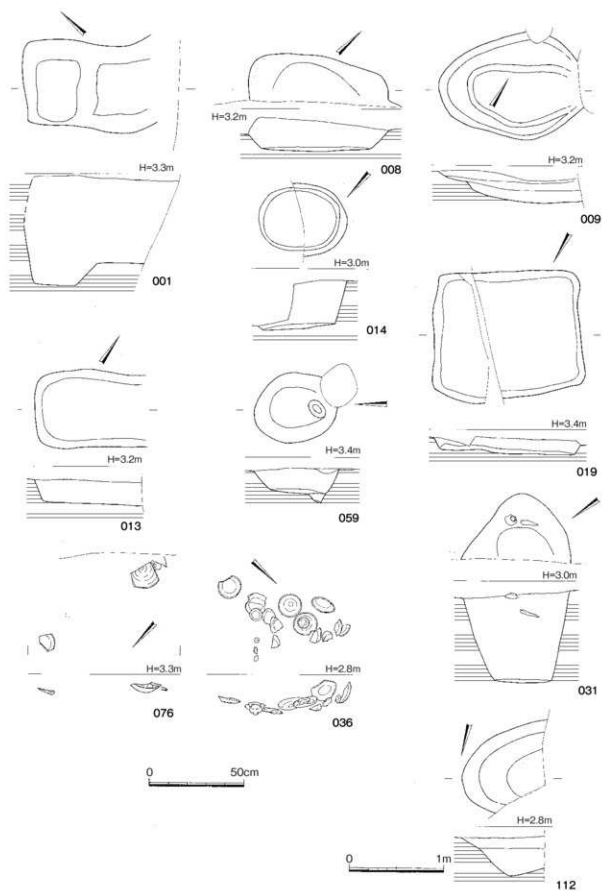
**008 (第17図)** 調査区南西側に位置し、南東壁に切られる。第1面で検出した。長軸は1.5m、残存幅は50cm、深さは35cmである。

**出土遺物 (第19図1, 2)** 1は土師質の瓶。復元口径30.0cm。2は陶器の水注の口部。濃緑色の釉がかかる。

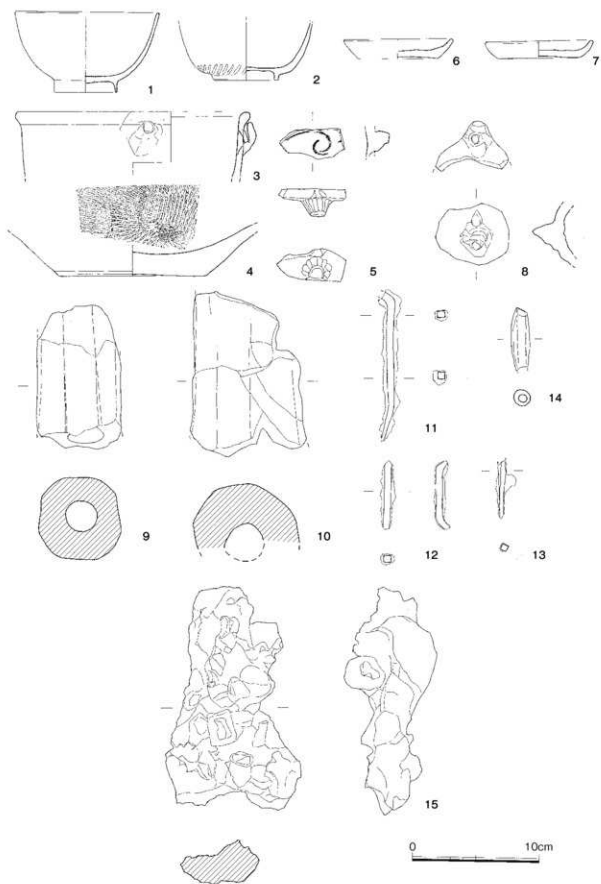
**009 (第17図)** 調査区南西側、008の北西側に位置する。第1面で検出した。013に切られる。最大幅1.1m、深さ30cmの平面楕円形の土坑である。

**出土遺物 (第19図3, 4)** 3は土師質の鉢。外面の肩部に※様の影文様が見られる。4は須恵器の蓋。復元口径12.0cm。重みが著しい。

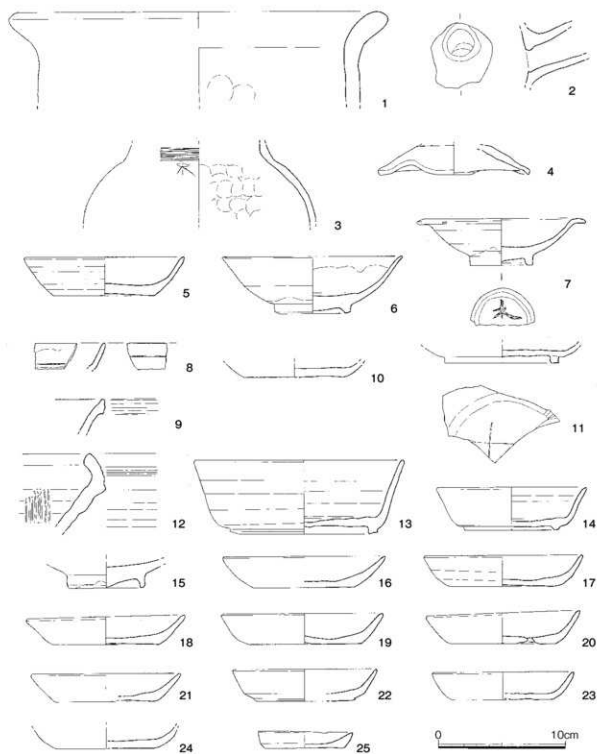
**013 (第17図)** 調査区中央寄りに位置する。第1面で検出した。009を切るが、攪乱に切られる。



第17图 土坑实测图(1) (1/20·1/40)



第18图 土坑出土遺物実測図(1)(1/3)



第19図 土坑出土遺物実測図(2)(1/3)

平面長方形で、残存長1.1m、幅80cm、深さ25cm。

出土遺物(第19図5) 5は土師器環。復元口径12.6cm、器高3.1cm、復元底径8.0cm。糸切り離し底部で板瓦痕が見られる。

014(第17図) 調査区中央寄り、013の東隣に位置する。第1面で検出した。半分は攪乱に切られる。平面ほぼ円形で、長軸95cm、短軸70cm、深さ50cm。

出土遺物(第19図6, 7) 6は白磁碗。復元口径14.2cm、器高4.5cm、底径6.0cm。半透明の乳白色の釉がかかるが、底部付近から高台内部まで露胎となる。内面の上部に軸溜りが見られる。7は白磁皿。復元口径13.4cm、器高3.7cm、復元底径5.0cm。透明な薄いベージュ色の釉がかかる。底部付近から高台は露胎となる。高台内部に墨書が見られる。

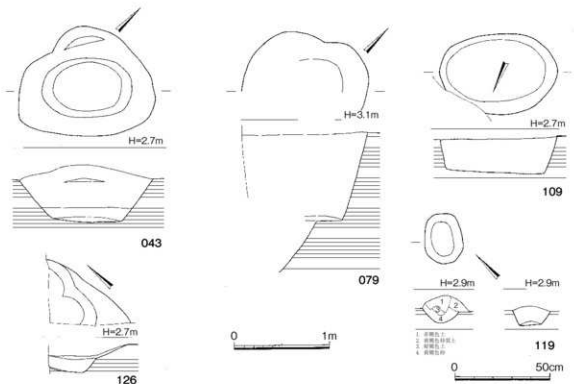
019(第17図) 調査区北東側に位置する。第1面で検出した。長軸1.5m、短軸1.3m、深さ15cmの平面長方形の土坑である。埋土は灰白色粘質土であった。

出土遺物(第19図8~11) 8は白磁皿の口縁部。内面に片切彫りの草花文が施され、透明な褐色気味の灰色釉がかかる。9は須恵器の壺もしくは甕の口縁部。10は土師器環。復元底径8.0cmで糸切り離し底部。11は須恵器の高台付き環。復元底径9.0cm、高台内部にヘラ記号が見られる。

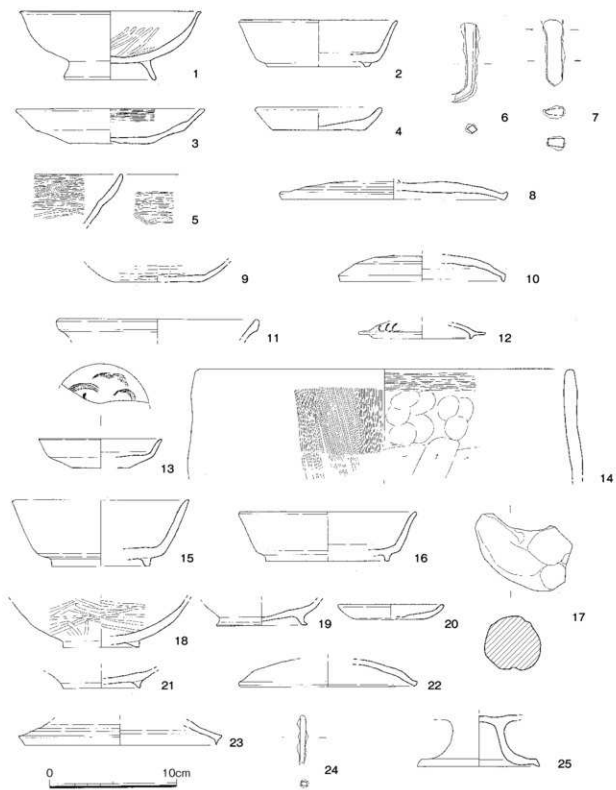
059(第17図) 調査区北東端に位置する。第1面で検出した。長軸90cm、短軸75cm、深さ25cmの平面楕円形の土坑である。

出土遺物(第19図12) 播鉢の口縁部片。8条の摺目が見られる。

076(第17図) 調査区北東側南東壁際で須恵器の環が2点検出された。第1面の検出である。



第20図 土坑実測図(2)(1/40-1/20)



第21図 土坑出土遺物実測図(3)(1/4)



**出土遺物（第19図13, 14）** いずれも須恵器の高台付き坏である。13は復元口径16.6cm, 器高5.9cm, 底径11.7cm。14は復元口径11.8cm, 器高3.4cm, 復元底径7.4cm。

**036（第17図）** 第2面で検出した。調査区南西壁付近に位置する。井戸028の掘方内で検出した土師器集積遺構である。土師器坏, 土師器皿が出土している。15世紀後半頃か。

**出土遺物（第19図15～25）** 15は青磁碗の底部。復元底径5.9cm。やや白く濁った薄青色の軸がかかるが, 底部は露胎となる。16～24は土師器坏。口径11.2～12.8cm, 器高2.2～2.5cm, 底径8.0～8.8cm。いずれも糸切り離し底部。20は底部に穿孔が見られる。25は土師器皿。口径7.5cm, 器高1.3cm, 底径6.2cm。糸切り離し底部で, 口縁部に打ち欠きが見られる。

**031（第17図）** 第2面で検出した。調査区南西端, 北西壁に切られる。長軸が1.1m, 残存幅70cm, 深さ95cmの土坑である。検出面付近で土師器の碗が出土している。11世紀代か。

**出土遺物（第21図1～7）** 1は土師器の高台付き碗。復元口径14.2cm, 器高5.4cm, 底径7.2cm。淡褐色から灰黒色を呈する。内面にはヘラミガキ調整である。2は須恵器の高台付き坏。復元口径12.5cm, 器高3.7cm, 底径8.0cm。3は土師器の坏。復元口径14.8cm, 器高2.7cm, 底径2.7cm。底部はハケメ, 板圧痕が残る。4は土師器坏。復元口径10.0cm, 器高1.8cm, 復元底径7.2cm。底部にはわずかに板圧痕が見られる。5は土師質の鉢。内外面ともにヘラミガキ調整が見られる。6は鉄製釘。7は刀子片か。残長5.0cm。

**112（第17図）** 第1面でラインは確認したが, 明確には第2面で検出し, 掘削した。099, 100と北西壁に切られ, 北東側に位置する。残存長90cm, 残存幅1.0m, 深さ40cmの土坑である。

**出土遺物（第21図8）** 8は須恵器の蓋。復元口径18.0cm。

**043（第20図）** 第2面で検出した。調査区中央付近やや南東寄りに位置する。長軸1.4m, 短軸1.1m, 深さ60cmの平面楕円形の土坑である。

**出土遺物（第21図9,10）** 9は土師器坏。復元底径7.0cm。内外面はヘラミガキが施され, 底部は回転ヘラケズリと板圧痕の調整が見られる。10は須恵器蓋。復元口径12.9cm。

**079（第20図）** 第2面で検出した。調査区北東側に位置し, 北西壁に切られる。井戸111を切る。おそらく平面円形で最大幅1.3m, 深さ90cmの土坑である。12世紀代。

**出土遺物（第21図11～17）** 11は白磁碗。復元口径16.0cm。半透明の淡灰白色軸がかかる。12は青白磁の水注蓋。復元口径10.0cm。青白色の透明軸がかかるが, 口縁端部は軸が剥ぎ取られる。13は龍泉窯系の青磁皿。透明なオリーブ色軸がかかり, 外底部は露胎となる。見込みには沈線が巡り, 刻劃花文が施される。14は土師器の甌。復元口径30.0cm。15, 16は須恵器の高台付き坏。復元口径は14.0cm, 器高5.2cm, 3.9cm, 底径7.8cm, 9.8cm。17は土師器の把手。

**109（第20図）** 第2面で検出した。調査区北東側に位置し, 井戸111を切る。長軸1.25m, 短軸85cm, 深さ35cmの平面楕円形の土坑である。12世紀代。

**出土遺物（第21図18～22）** 18, 19は土師器の高台付き碗である。復元底径6.0cm, 7.0cm。18は内外面ともにヘラミガキが施される。20は土師器の皿。復元口径8.3cm, 器高1.2cm, 復元底径6.0cm。底部

はヘラ切りである。21は須恵器の高台付き杯。復元底径6.0cm。22は須恵器蓋。復元口径13.7cm。

119 (第20図) 第3面の検出である。調査区北端に位置する。長軸50cm、短軸40cm、厚さ30cmの範囲でこんもりと明褐色の焼土が堆積している。

出土遺物 (第21図23, 24) 23は土師器の蓋。復元口径15.1cm。24は鉄製釘。

126 (第20図) 調査区北西壁の拡張部、第3面で検出した。須恵器高杯が出土している。

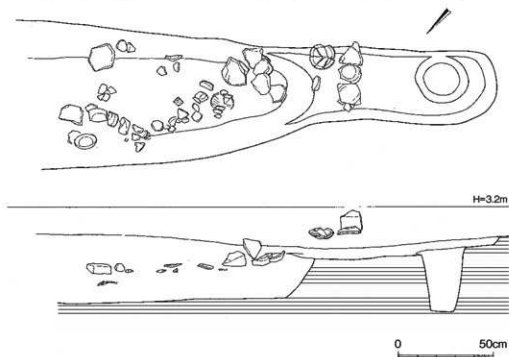
出土遺物 (第21図25) 須恵器の高杯脚部。底部径9.6cm。

### (3) 溝状遺構

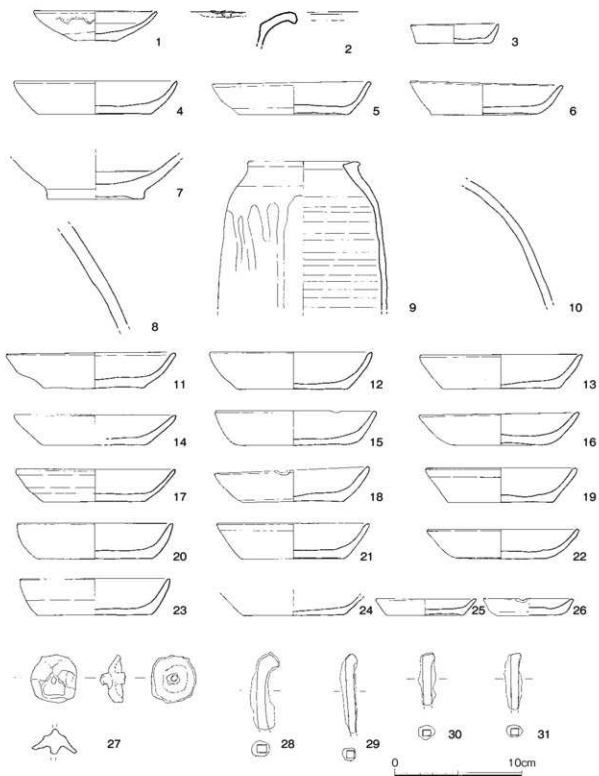
068 (第22図) 調査区北東端、第1面で検出した溝状遺構である。検出時は、溝は南西-北東方向に延びるが、南西側は019に切られて完結し、北東側は北東壁に切られる。第2面で土師器の坏、皿、礫が集積した状態で出土した。延長2.5m、最大幅75cm、深いところでは35cmを測る。出土遺物から11世紀後半から12世紀前半と考える。

出土遺物 (第23図) 1～6は上層から出土した。1は白磁皿。復元口径9.6cm、器高2.3cm、底径3.4cm。外底は露胎となり、半透明の薄いオリーブ色釉がかかる。2は黄釉陶器の盤。内面に鉄絵が施される。口縁端部の釉は剥ぎ取られ、目跡が残る。3は土師皿。口径6.9cm、器高1.6cm、底径5.8cm。糸切底。4～6は土師器坏。口径12.9～12.1cm、器高2.6～2.5cm、底径9.0～8.2cm。4、5には底部に板圧痕が残る。

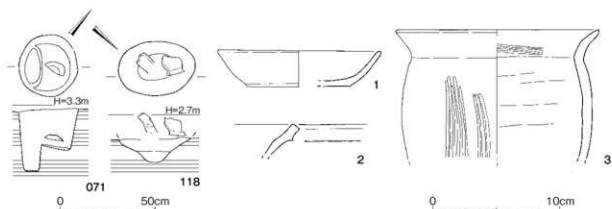
7～31は下層から出土した。7は白磁碗の底部。底径7.6cm、外底は露胎となる。8～10は褐釉陶器壺。8は壺の胴部。外面はタタキの後暗褐色釉を施し、内面は上半に茶褐色釉、下半は露胎に茶褐色釉を斜方向及び筋状に施す。9の口径は8.9cm。外面上半には茶褐色の釉がかかり、下半は釉を流しかける。内面は露胎となる。口縁端部に目跡が残る。10は壺胴部片。外面には茶褐色釉、内面上部に黄褐色釉がかかり、下半は露胎となる。11～26は土師器の坏及び皿。集積した状態で検出された。11



第22図 溝状遺構068実測図(1/20)



第23図 溝状遺構出土遺物実測図(1/3)



第24図 柱穴実測図・柱穴出土遺物実測図(1/20・1/3)

～24は坏。口径13.4～11.8cm, 器高2.9～2.3cm, 底径9.0～7.2cm。すべて糸切底で12, 13, 15, 17, 18, 21, 24は板圧痕が残る。また, 15, 18は口縁部に打ち欠きが見られる。25, 26は土師器皿。口径8.0, 7.1cm, 器高1.4cm, 底径6.0, 7.0cm。いずれも糸切り底。26は口縁部に打ち欠きが見られる。27は鉄製の紡錘車か。径が3.5×3.8cm。内側は湾曲している。28～31は鉄製釘。

#### (4) 柱穴

071 (第24図) 調査区北東側に位置し, 第1面で検出した。土師器の坏が伏せられた状態で出土した。

出土遺物(第24図1, 2) 1は土師器坏。復元口径14.8cm, 器高2.8cm, 復元底径8.0cm。糸切底。2は陶質土器の無頸壺の口縁部か。

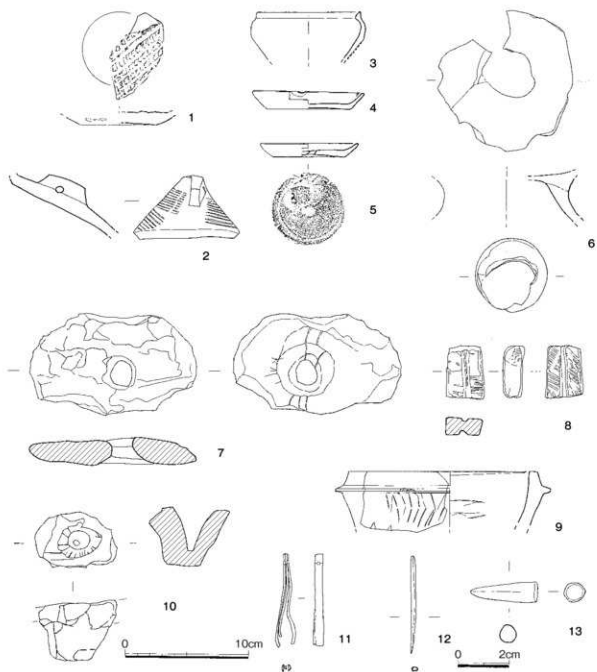
118 (第24図) 調査区北東側, 南東壁際に位置し, 第3面で検出した。甕, 襷が出土した。

出土遺物(第24図3) 3は土師器の甕。外面は板状工具による縦方向のナデの後, ヘラ状工具による縦方向のナデ, 内面は横方向の強いナデが施される。

#### (5) その他の出土遺物(第25図, 第26図)

第25図1～10は第1層包含層出土。1は国産陶器の鉋皿。復元底径6.0cm。灰緑色の釉がかかる。2は朝鮮陶器の壺か。把手には1カ所穿孔が見られる。15～16世紀。3は須恵質の無頸小壺。復元口径8.0cm, 残高3.8cm。4, 5は土師器皿。口径8.7, 7.7cm, 器高1.4, 1.1cm, 底径6.5, 5.6cm。4は口縁部に打ち欠きが見られ, 5は底部に穿孔が施される。6は土師器の高坏の脚部。坏部の中央に径が4cmの孔が穿たれる。7～10は滑石製品の転用品。7～9は石錘。7は長さ13.2cm, 幅7.5cm, 厚さ2.0cm, 重量400g。中央に径が1.7cmの孔を施す。紐ずれの跡が見られる。8は長さ4.2cm, 幅2.8cm, 厚さ1.4cmの直方体に成形し, 表裏の2面に溝を刻む。9も石鍋の転用品。石鍋を長さ6.5cm, 幅4.7cmに打ち欠き加工する。鐙の部分に紐掛けの跡が見られる。10は石鍋の把手部分の中央部を穿ち, 容器状になっているが, 加工途中の未製品と思われる。11～13は銅製品。11は鉗子。トレンチ出土。長さ7.3cm, 重量65g。2枚の短冊状の薄い銅板が舌状の銅板を挟んで組み合っている。挟まれている板の上部には凸状の突起があり, それを挟む外側の銅板の上部は凹状にへこんでこの部分が組み合っている。反対側にもこの痕跡が見られる。12は鎌か。井戸050の上層出土。長さ39cm, 最大幅20mm, 重量0.5g。13はキセルの吸い口か。第1面北東側上面出土。円錐形を呈し, 中は空洞となる。長さ3.6cm, 径0.7cm, 重量1.7g。

第26図1～5は銅銭。1～3は050上層出土。1, 2は「寛永通宝」。3は「開元通宝」か。4は



第25図 包含層出土遺物実測図(1/3・2/3)

036出土。「紹興元宝」か。5はトレンチ出土。「元祐通宝」。

#### 4. まとめ

本調査地点では、大半が井戸の切り合いで占められていた。ただ、時的には幅があり、生活時期の変遷が窺える。

遺構として最も古い時期は9世紀代の076である。明確な遺構ラインは確認できず、須恵器坏が出土しているのみであるが出土状況から混入とは考えられず何らかの遺構であると思われる。

遺構の主体は11世紀以降となる。11世紀代に入り031, 014, 溝状遺構068が現れ、12世紀代では079, 109, 柱穴071が確認される。井戸は11世紀～12世紀代に105, 056・102, 111が掘り込まれる。14世紀代になると井戸033が掘削され、この井戸が埋没した後の15世紀に入り028(井筒1, 井筒2)が掘



第26図 出土銅銭(1/1)

り込まれる。028の埋没後15世紀代には土師器集積036が見られる。16世紀代に入ると石組井側の050が掘削される。17世紀代になり井戸006及び052・057、土坑001が掘削され、本調査で最も新しい時期となる。遺構の時期範囲は近隣の調査地点とおおむね合致している。

まとめると、9世紀代に生活痕跡が見れるが、本格的に居住が始まるのは11世紀代に入ってからと考えられ、その後17世紀まで継続的に居住が見られる。また、本調査地点は各時期にわたる井戸が多く確認されているが、南東隣接の85次地点においても井戸が多く検出されており、このことから当該範囲は長期間にわたって井戸が掘削された区域であるといえる。これが水脈によるものか、居住空間の区分を示すものかは現在のところ不明であるが、周辺の調査事例と合わせて検討していきたい。



1 調査区南西側第1面全景(南西から)



2 調査区北東側第1面全景(南東から)



3 調査区南西側第2面(南西から)



4 調査区北東側第2面(南東から)



1 調査区南西側中央部第3面全景(北東から)



2 調査区北東側第3面全景(北西から)



3 調査区南西側南西部第3面全景(南西から)



4 井戸050(南西から)



6 井戸052(北東から)



7 井戸057(北東から)



5 井戸050井筒(西から)





1 井戸028井筒2(北東から)



2 井戸099,100(南西から)



3 井戸033(西から)



5 井戸052,057,056の掘方土層断面(東から)



4 井戸033井筒(東から)



6 井戸056(東から)



7 井戸102(北東から)



1 井戸105(西から)



2 井戸111,土坑079(北東から)



3 土師器集積036(北から)



4 集積076,溝状遺構068(北から)



5 土坑031(北東から)



6 土坑109(東から)



1 焼土119(南西から)



2 焼土119断面(南西から)



3 溝状遺構068(北東から)



4 溝状遺構068下面遺物出土状況(南から)



6 土坑109(東から)



1 拡張トレンチ1第1～2面(北西から)



2 拡張トレンチ1第3面(北西から)



3 拡張トレンチ2第1面(北東から)



4 拡張トレンチ2第2面(北東から)



5 拡張トレンチ2第3面(北東から)



6 調査区北西側壁(南から)



7 調査区北東側壁(南西から)



076 出土遺物



036 出土遺物



068 出土遺物



033 出土遺物



099,100 出土博多人形



001 出土羽口、鉄滓



050 出土羽口、鉄滓



包含層その他出土遺物

報告書抄録

ふりがな	はかた162
書名	博多162
副書名	博多遺跡群第208次調査報告
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1368集
編著者名	井上繭子
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号
発行年月日	2019年3月25日
所収遺跡名	<small>はからいせきぐん</small> 博多遺跡群第208次
所在地	<small>ふくおかしはからくてんやまら</small> 福岡市博多区店屋町41番、42番
市町村コード	40132
遺跡番号コード	0121
北緯・東経	北緯33° 44' 66" ・東経130° 24' 60"
調査期間	20170116～20170321
調査面積	109㎡
調査原因	共同住宅建築
種別	集落
主な時代	中世～近世（9世紀～17世紀）
主な遺構	井戸・土坑・溝状遺構
主な遺物	土師器・輸入陶磁器・瓦
特記事項	井戸が切り合った状態で検出された。
要約	本調査地点は、博多遺跡群の中央付近に位置する博多浜と呼ばれる砂丘の中央からやや南寄りに立地する。9世紀～17世紀にかけての生活跡が確認されたが、とりわけ各時代の井戸が切り合った状態で検出された。

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1368集

**博多162**

－ 博多遺跡群第208次調査報告 －  
2019年（平成31年）3月25日

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 三栄印刷株式会社  
福岡市博多区千代1-6-1







